

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



《蛭狩り》シカゴ美術館蔵

特集 鈴木春信

江戸のカラリスト登場

鈴木春信の白

日本は春夏秋冬の季節が順ぐりにめぐってくる、実にありがたい国柄です。常夏のどこことやらも、たまの観光には良いものの、いざそこに暮らすことになれば、私などは単調な気候の連続に耐えられなくなりそうです。夏は暑くて当たり前、それも峠を越えて、いつの間にか朝夕には秋風の訪れを感じられる頃とはなりました。

今朝、近くの公園を散歩していましたが、白い芙蓉の花がいくつ咲いていて、かすかな風を涼しげに受けて、揺れていました。その清らかでさわやかな白い花の姿に、おのずと鈴木春信の錦絵が思い出されてきました。そう、待望の「鈴木春信」展が、当館で開催されているのです。

鈴木春信は、私にとって初めて真剣に美というもの、あるいは美のありかについて、しみじみと考えさせてくれた、なつかしい画家なのです。それは二十歳(はたち)の時でしたからもう40年ほど前のことです。そして、卒業論文のテーマに取り上げ、美術の歴史を専門とする道筋を選ぶ結果となったのも、この画家のせいでした。それ以来、ずっとその版画の魅力にとらわれつづけてきたものでした。

そういう私が自信を持っておすすめできるのが、今回、山口県立萩美術館・浦上記念館と共同で開催にこぎつけた、この、空前絶後という良い質と規模の春信展です。シカゴ美術館や大英博物館など欧米の主要な美術館・博物館8館から好



意的なご協力が得られ、国内からも公的な機関のみならず多くの個人の方々から貴重な逸品を拝借することができました。総計265点の春信画が一堂に会するのですから、まさに圧巻というほかありません。

春信は、浮世絵の歴史の中間点、それも劇的な転換点に位置する、歴史的にも重要な浮世絵師です。明和2年(1765)、初めて多色刷りの木版画を実現し、これに「吾妻錦絵(あずまにしきえ)」と名付けて、以後の浮世絵黄金期を迎えるきっかけを作ったのでした。「吾妻」は「東」とも書き、京都の西に対して東の江戸で生まれた、錦織物のように色美しい版画だというわけです。春信によって江戸の浮世絵は、本当の意味でのカラー時代に入ったのでした。

何色も色を重ね刷ることが可能になったとき、春信はその天性すぐれた色彩感覚を存分に発揮したものでした。その辺りは、今回会場にお借りできた保存状態の格別に良い錦絵によって、皆様ご自身で実感していただきたいのですが、実は春信版画の

魅力は、何も色を刷っていない、紙の地を活かした白にこそあるように、私は思っています。

春信は、版画の料紙に、上質で厚手の和紙、奉書紙を使用しています。ふっくらとして白いその紙の地を、そのままに残して、女性や子供の肌、梅や桜の花、降り積もる雪などの表現に活用しているのです。黒も含めた様々な色に囲まれて、その純白の紙の地の美しく、きよらかに映えていること、驚くばかりです。

私がこの文章を書いている今の時点ではまだ展覧会は始まっていないのですが、すでに予告の段階で、春信展のポスターやチラシが大変好評のようです。それらは、ニューヨークのメトロポリタン美術館からお借りする「夜の梅」という作品をもとに、実に魅力的にデザインされたものですが、このデザイナーは春信版画の魅力を実によく理解してくれたものと、ひそかに感服しているところです。白い梅の花の枝、廊下に立つ乙女の

顔と手と下着の白、差し出す手燭のあかりの白、そして、展覧会を案内するすべての文字までもが、本来は夜の闇をあらわす黒のバックに白抜きで浮き出されているのです。



鈴木春信展ちらし表裏 デザイン：下田理恵

色彩の自由が許されたその時点で、春信は、白の豊かな表現力に気づかされたのでしょ。何も色を与えない「虚」の紙面に、色以上の「実」をそなえさせたその鮮やかな手腕に、つくづく感服させられます。私は以前、春信を「絵筆をもつ詩人」と称したことがありますが、新たに「白の魔術師」という称号を授けたいくらいです。

前に、春信を「絵筆をもつ詩人」と称したことがありますが、新たに「白の魔術師」という称号を授けたいくらいです。

鈴木春信について語り出すと、ついつい気分が高揚してしまい、ふだんの饒舌がますますつってしまおうようです。この辺りで控えさせていただきます。ともかく、これまでになかった、そして少なくともこれから数十年の間この規模では世界中のどこでも開催が不可能と思われる春信展なのです。どうかくれぐれもお見逃しのないようにと、願わずにいられません。千葉でご覧いただけなかった節には、どうか次の山口県萩市の会場までお出かけになるよう、おすすめいたします。それくらい時間と旅費を費やしても、十分にお釣りがくるほどの値打ちものだからです。

館長 小林 忠

青春の浮世絵師 鈴木春信 - 江戸のカラリスト登場

32年ぶりに開催される 「鈴木春信展」を楽しむ

長らくお待たせ致しました。一個の展覧会を創りあげるには、膨大なエネルギーと多大な時間を費やす作業です。とうとうオープンした鈴木春信展、その全貌を展示構成に従って紹介しましょう。



《夜の梅》メトロポリタン美術館蔵

まず序章プロローグでは、春信の魅力を一層ご理解いただくために代表的な作品により、美のエッセンスをご案内します。続いて6つのゾーンで、春信の作品を楽しんでいただきます。以下はその各章の内容とさわりの部分です。鑑賞の手引きにして頂ければ幸いです。

1. 浮世絵界へのデビュー

春信が浮世絵界へ本格的なデビューを果たしたのは、宝暦10年(1760)頃のことであるらしい。版画の技法はまだ熟しきっておらず、当時はまだ3色程度の色版による版画、すなわち紅摺絵(べにずりえ)の時代であった。当初手がけていたのは主に役者絵で、その画風は先に活躍していた鳥居清満(1735-85)の作品に倣うものであったが、春信の役者絵は現在大変希少で、ほとんどが世界に1点ずつしか確認されていない。さらに今回役者絵本や版木という新資料が発見され、予想以上に春信の役者絵における活動も盛んであったことを想像させてくれる。

紅摺絵の時代でも明和期(1764-72)を目前にすると、「風流やつし七小町」に代表されるような、春信らしい優雅な美人画風が確立されてくる。さらに見立・やつしといったウィットに富んだテーマの扱いも魅力的なものになり、錦絵時代の到来を予感させてくれるのである。

水絵(みずえ)と呼ばれているのは、輪郭線に墨を用いず、藍(露草)の青や紅といった色を中心に摺り出したやわらかな印象の版画である。古典や故事を題材にしたものが多く、水絵の効果も手伝って、閑雅な趣が伝えられる。高尚な好みを反映したこのような版画は、その版画の風合いからも、おそらくは明和期に入った直後に多く制作されたものであろうと考えられる。



《風流やつし七小町 関寺》シカゴ美術館蔵

2. 絵暦交換会の流行と錦絵の誕生

春信は、錦絵が創始された頃の第一人者として位置付けられる。この多色摺の木版画技法の発達した段階である錦絵が誕生したきっかけは、明和期(1764-72)のはじめに、裕福な趣味人の間で絵暦(えごよみ)の交換会が大流行したことにあった。陰暦では30日ある大の月と、29日しかない小の月とがあり、その順序が年ごとに变化したが、その大小の月の順番を判じ絵風に示した摺物(すりもの)が絵暦で、彼らは私的に制作した絵暦を知人同士で交換して、その趣向を楽しみ、優劣を競ったのである。

この絵暦ブームを先導した人物の一人が巨川(きょせん)、すなわち知行1600石の旗本(はたもと)大久保基四郎(おおくぼじんしろう)で、主に春信に作画を依頼して「巨川工」と款した摺

物を制作している。仲間を集めて絵暦などの摺物を交換する会が活発に行われる中で、より色彩豊かで豪華な摺物を求める彼らの熱意に、絵師、そして彫師と摺師が応えてきた結果生まれたのが錦絵の技法なのであった。

絵暦ブームは明和3年前半頃には終わったが、この時これらの美しい摺物に目をつけたのは版元たちで、暦の部分や注文者の名を削り、色味も変えて、商品として売りに出した。この江戸の新たな名物は「あずま錦絵」と名付けられ、誇らしげにその誕生が宣言されたのである。

3. 絵を読む楽しみ

多くの春信の作品は、鑑賞者に主題を読むことを期待している。今日"見立絵"(みたてえ)と呼ばれているのは、和漢の古典物語や故事を、江戸時代当時の風俗に置き換えて描くという一種のパロディ的趣向をもった作品群で、鑑賞者はその原典を当てたり、置き換えの機知に感心したりして作品を楽しんだのである。

春信の作品では、画中に見立絵の原典を示す題名が記されることはほとんどない。おそらく当時であっても絵だけで春信の趣向を解き明かすには、相当の教養が必要であっただろう。見立絵であることは察せられながら、現在ではそのテーマがわからなくなっている作品も多々ある。

深く巧まれた趣向は、時に幾重にも用意されていることもあるようである。その知的なトリックをどこまで読んでいいのか迷わされる場合もあるが、必ずや当時の鑑賞者も様々に頭をめぐらしたはずであり、絵師は当然それを予想していたはずである。ある程度の知識がなければ解くことができない趣向、あるいは教養人でさえ迷わせてしまう趣向、そうであればこそ春信の見立絵は魅力的なのである。



《坐鋪八景 包紙》シカゴ美術館蔵

4. 江戸の雅 古典への憧れ

春信には「思古人」という号がある。「古(いにしえ)を思う人」というその意味のとおり、春信の作品にはいにしえを思わせるところがある。江戸時代その当時のさりげない風俗のありさまを描いていても、たとえば平安時代の雅びやかさを感じさせる格調の高さがあり、古く和歌などに表されてきた日本人の季節感や恋心を現出するような気分がある。実際、春信の作品の多くが、絵の発想の契機を古典文学に求めているのである。



《六玉川 千鳥の玉川》メトロポリタン美術館蔵

中でも画面を雲形や短冊・色紙形で区切って古典和歌を記し、その歌の意味に通わせた江戸の風俗を描く作品群は、春信の古典志向を最もよく伝えているといえるであろう。いにしえの歌の詠み人の心が、春信によって様々な江戸風俗として置き換えられて描かれ、再生されていったのである。このような趣向の作品は、シリーズで制作されることが多く、「六玉川」や「三十六歌仙」、「風俗四季哥仙」など、美しく雅びやかな挿物(そるいもの)が多く生まれている。

5. 青春の浮世絵師

春信ほど純粋に恋を取り上げた浮世絵師はいないであろう。



《雪中相合傘》メトロポリタン美術館蔵

年若い男女の恋の姿が、彼らの出逢いの瞬間やさりげないふれあいの様子が、鑑賞者の心さえ甘く透き通ったものにする。春信の繊細で優美な筆運び、見事な色彩感覚はそれら表現するのにふさわしく、男女の容姿は共に華奢で可憐であり、二人はまるで夢の中の住人であるかのように美しい。「雪中相合傘」は人々の心に最も深く記憶されてきた代表作である。

そして春信ほどごく平凡な家庭の景を題材とした浮世絵師もいないであろう。母と子の温かなふれあい、かわいらしく無垢な子供達の姿には心が癒される思いがする。そして同時に自らの子供時代を想起し、切ないほどの郷愁を感じるのである。

春信自身の家庭環境についてはまったく資料がない。春信に



《見立夕顔》ホノルル美術館蔵

とって実際にあった光景なのだろうか、それとも憧れの光景であったのだろうか。春信の年齢はすでに40代半ばにさしかかろうとしていた。すでに得ることのできない世界に限りない郷愁の想いを込めた大人のためのボエム-青春の浮世絵師と呼ばれるゆえんである。

6. 江戸の人気者

明和5年(1768)頃より、春信は江戸で評判の町娘、吉原の遊女、また江戸名所など、江戸に実在の題材を作品に取り込むことが多くなっていく。



《浮世美人花見立 丁子屋内丁山 花王》シカゴ美術館蔵

特に笠森稲荷の水茶屋鍵屋のお仙や浅草奥山の楊枝店本柳屋のお藤という当時評判の美人を描く作品は大ヒットしたのであった。

「浮世美人寄花」は当時人気の美人たちを集めた挿物であり、色摺の豪華な絵本『青楼美人合』は、吉原の遊女をその名前と店名を入れて描き出したものである。そして「風流江戸八景」では、江戸の庶民に親しい名所を画面に取り入れている。高価であった春信の

作品は、それまで一部の裕福な人々を中心に楽しまれていたものと考えられるが、この主題の変化はより広い層の鑑賞者、すなわち大衆に向けられたものであっただろう。案の上それは大ヒットし、春信は実質的に、時代の人気者となったのである。



《風流江戸八景 真乳山の暮雪》メトロポリタン美術館蔵

明和7年(1770)春信は急死する。あの絵暦ブームからわずかに5年、あまりに早すぎるスター絵師の死であった。春信が最後に行った主題の大衆化が、次世代の浮世絵を方向づけた役割も見逃してはならないだろう。その後春信を敬愛した浮世絵師たちは、江戸に実在する遊女や評判の町娘を題材とすることで、美人画の黄金時代を築き上げたのである。

学芸員 田辺昌子



鈴木春信展展示作業 オープンの2日前

青春の浮世絵師

鈴木 春信

- 江戸のカラリスト登場

2002(平成14)年9月14日(土) - 10月20日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 但し祝日の場合は翌日

【入館料】 一般1000(800)円

大学・高校生700(560)円

中・小学生 300 (240)円 ()内は前売・団体30名以上の料金

前売券はJR東日本びゅうプラザ(10月17日まで)で発売。

10月17日まで有効。

【主催】 千葉市美術館 / 朝日新聞社

【協力】 日本航空

特別講座

「春信作品に見る風流」

講師：浅野秀剛(千葉市美術館上席学芸員)

10月6日(日) 午後2時より(開場：午後1時30分)

先着順150名様まで

11階講堂にて 参加無料

スライド&レクチャー

「鈴木春信展の見どころ」

毎週水曜日 午前10時半より

展覧会の見所を、スライドを使って分かりやすく解説します。(約1時間)

9階講座室にお集まり下さい。

20名以上のグループでお越しのお客様には、上記以外の日時にも開催することが可能です。事前に担当：田辺までご相談下さい。

春信の版画に用いられた絵具は、大変光に弱いものです。その美しい色を守るため、会場内の照明を抑えております。どうぞよろしくご理解くださいますようお願い申し上げます。



トーマス・ルフ 《星座 18h 20m/ -65 °》
Thomas Ruff *18h 20m/ -65 °

千葉市美術館所蔵作品展

自然律

10月22日(火) - 12月23日(月/祝)

所蔵作品展「自然律」を開催します。自然律とは二つ以上の自然の出来事や性質の間で成立している恒常的で普遍的な関係を経験的にいい表したものです。自然の法則です。西洋では、古くは芸術は自然を模倣したものと考えられましたが、自然それ自体は低次元な素材に過ぎず、人間の手が加えられた芸術美こそ高尚なものと考えられてきたそうです。しかし私たち東洋の感性は、四季の気候の変化や、その時々の人々の営み自体から美を汲み取ろうとします。

特に写真を用いた美術表現では、山野や街路などのありふれた風景それ自身が、私たちのイマジネーションを拓ける力を持っていることがよく分かります。光学現象である写真は、それ自体自然法則の一部だからなのかも知れません。この展覧会では、写真表現を中心に、広大な自然律を捉えた作品を展示します。

展覧会やイベントの日程や名称は現時点での予定です。変更される場合がありますのでご注意ください。また、入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは下記へお問い合わせ下さい。ホームページでは最新の情報がご覧になれます。

休館日 毎週月曜（祝日の場合はその翌日） 年末年始 展示替期間

開館時間 午前10:00 - 午後18:00 平日の金曜日は20:00まで（入館受付は閉館の30分前まで）

お問い合わせは 043 - 221 - 2311(代)これまでご利用頂きましたNTTハローダイヤルは3月末いっぱいでご使用頂けなくなりましたのでご注意ください。

URL <http://www.city.chiba.jp/art>

e-mail museum@city.chiba.jp

3回目を迎えるアートプロジェクト 検見川送信所

千葉大 学生が千葉市検見川を舞台に 展開するアートプロジェクト

千葉に、市内の人にはかえってあまり知られていないアートイベントがある。その名も「アートプロジェクト 検見川送信所」。舞台はかつて東京湾に面していた街道沿いの漁師町、千葉市花見川区検見川町。このイベント、実は今年で3回目を数える。しかもこのプロジェクトは、大学生が主体的に立ち働くイベントのモデルケースとして、各地で似通ったイベントを誘発する契機ともなりつつある。市内で開催される催しとあっては、市立の美術館として無関心ではいられない。

プロジェクトの実態は、千葉大学の「文化をつくるA」という講座が学内の関係学科と連携し、実行委員会とともに主宰するというもの。実質的に立ち働いているのは学生達だ。

プロジェクト名称が語るように昨年までは検見川町5丁目の東京無線局検見川送信所跡地が舞台であった。その送信所は、大正15(1926)年に開局、戦前戦中は数多くの歴史にとどまる軍用無線の発信地として活躍し、戦後も1979年に閉局するまで日本の通信技術の発展に寄与した歴史的施設。今では本館のみが半ば廃墟の姿を呈するが、それでも旧逓信省吉田鉄郎設計の建築は分離派風の面影を残し、各部に贅用されたアールの縁取りなど純粋なモダニズム建築には見られぬ美しさを見せている。その敷地で開催された1年目の2000年は田浦律子、佐藤時啓の二人が作品とパフォーマンスを展開。2年目の昨年はタイトル「湾が見えるよ」の下、川俣ゼミ、南村千里、中村政人の三組によるプロジェクト、シンポジウムやカフェが実現した。そして今年は一旦送信所跡地を離れ、検見川町2丁目から5丁目にかけての通り沿いが舞台。送信所は、モニュメンタルな位置づけでプロジェクト名に引き継がる。テーマは「たまり場・陽だまり・舟だまり」。参加アーティストは間島領一、藤浩志のふたり。

間島領一の「検見川白書in千葉」は県内の30の自治体に、ある「質問状」を送付し、「回答」をその町の特産品等とともに回収。検見川町内の有力者にも同じ過程を行う。そしてその結果を展示し、そこにあらわれる千葉、検見川像を視覚化する。9月中旬現在、各市町村から工夫あふれる回答や特産品が集まりつつあるというが、我らが千葉市首脳部からは、未だいろよい返事は得られていない様子。かたや藤浩志は自転車を使ったデモンストレーション、そして廃材ペットボトルを利用したイスや机を制作、原始経済の交換行為を想起させる「かえっこ」、「ぬいぐるみシアター」を展開する。その他総合企画としてミニFM局、アーティストトーク、チャリ(自転車)カフェ、等々。

大学が「街」にかかわり、学生が運営にかかわるプロジェクトとして、近年には新潟大・内野アートクロッシング2001、取手アートプロジェクト(東京芸大)等があり、今年は武蔵野美大の学生が旗の台商店街に作品を「ホームステイ」させるささやかな試みがあったともきく。これらは、統廃合が本格化し近い将来には倒産も現実のものとなるという危機の一方で、大学が積極的に社会にコミットすることがやっと許され、奨励された結果と見ることが出来る。しかし、特許技術や製品という成果物によって社会還元される自然科

学とは異なり、プロジェクトにおいては教員や学生、またアーティストという人間が、本当に町へ出ざるを得ない。そしてそこで起きうるコンフリクトの原因は、ある1人の住民にとって肝腎なのがアートがどうのこうのという御託でなく、その出来事が自分や家族にとって興味の対象か否かという点だろう。「街を舞台」にする以上そもそも表現の対象を取捨選択できない。だからそこで様々な意味と形態でのコミュニケーションが必要となる。まずはその社会で認知の対象たらしめる行為、コミュニケーションづくりが必要なのだ。

しかしある一定の地域内でのコミュニケーションづくりとは、本来外来者の役割ではない。あからさまに反感を示される場合も多いはずだ。そこは訪問販売・営業活動同様、誠実な姿勢と無償の時間をかけた奉仕で信頼を勝ち得るしかない。もしかしたらそれは数年単位の時間が必要な問題かも知れない。その過程がアートの問題か否かということは、果たして必ず問題になるだろうが、既成のアートの概念をもってまさに現時点でのアートを断罪することが出来るだろうか。本来視覚芸術といえども時間性を帯びてしかるべきものだ。

このプロジェクトの場合の学生たちの真剣さは特記すべきものだと思う。代表の大島君によれば、大部分の学生は4月には入れ替わるから、毎年ゼロからのスタートになるという。しかしアーティストの活動を補佐する班、広報に携わる担当、財務担当、それぞれ自分の役割を果たしながら、地域から積極的な協力者も出現している模様。彼らの年頃には口の利き方も知らない学生だった私なんぞにしてみれば、この場で発揮されている社会性に瞠目するし、他ならぬ我が町で活動してくれることを驚異にも思う。モチベーションを低下させることなく、プロジェクトの意味を年々新たに生み出して欲しい。(ha)



アートプロジェクト 検見川送信所2002 たまり場・陽だまり・舟だまり

2002年10月12日(土) - 10月13日(日)
千葉市花見川区検見川町内を会場として開催
参加アーティスト:間島領一、藤浩志、南村千里
プロジェクトの詳細をホームページで公開している。
<http://www.kemipro.e.chiba-u.ac.jp/2002>
最寄り駅はJR総武線新検見川駅、京成検見川駅

主催:検見川アートプロジェクト実行委員会/千葉大学総合科目「文化をつくるA」+芸術学(長田謙一)研究室
後援:千葉県、千葉市教育委員会、NHK千葉放送局(申請中)
協賛:アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、トヨタ自動車株式会社、NECメディアプロダクツ株式会社、リオン株式会社、
協力:ミュージズ・カンパニー

展示室で考える

展覧会が出来あがるまで 1 企画展のしくみ

美術館で開催される展覧会はコレクションによる展覧会と「企画展」に分けられます。コレクション展は、千葉市美術館では所蔵作品展と呼び、工夫を重ねながら年間を通じて開催されています。本紙4号で、その工夫を詳述したことがあります。かたや企画展はもっと手広く、ある作家や、時代の動向を扱う企画で、当館では年に5、6回開催されています。なかでも春秋のちょっと大規模なのを特別展と呼んだりします。ことしのそれは「ジ・エッセンシャル」と目下開催中の「鈴木春信」。このような企画を作り上げることは一体どんな作業なのか、恐らく皆さん興味深々でしょう。では、美術館がどんな風に企画展を作り上げるのか、その過程をはなしましょう。

まずは企画展の種類です。企画展とはその呼び名からして、会場である千葉市美術館が企画するからそう呼ぶわけです。だからポスターちらし等の事前情報から、実際の展示の美しさ、カタログの出来具合、事後に残す影響まで、主催者である美術館の企画力、マネジメント力、デザインセンス等々、即ち実力が表れるものです。しかし実は、開催しているその美術館が企画したわけではない展覧会もあります。もう一度、ちらしやポスターを注意深く観察してみてください。会期会場を記した近くに、小さな活字で、主催者が記入してあります。例えば千葉市美術館での企画なら千葉市美術館の主催に決まっているのですが、それと並んで新聞社や放送局の名が入っていることが多いのに気付かれたでしょうか。その場合、その展覧会を主体的にプロデュースしたのは、実はマスコミのこともあるのです。五大紙と呼ばれる大手各新聞社、それに有力な地方新聞社や放送局は、それぞれ企画局(部)あるいは事業局という部署をもって、そこには事業、つまりイベントづくりのプロがいて、スポーツ事業や文化事業を企画しています。このようなマスコミ主催の展覧会の場合、殆どは数カ所を会場とする巡回展の形式を取りますが、さらにそれには大きく分けて二つのケースが考えられます。ひとつは実質的にマスコミが展覧会を作り上げ、各美術館はお金を払って企画を買い取る、という場合。この場合作品の出品交渉やカタログの準備も一切切マスコミやその下請けのイベント会社が行い、極端な場合、会場である美術館は、会場をカラにして作品と関係者が到着するのを待っているだけ、ということになります。「××美術館名品展」のような海外の有名コレクション大移動展の場合はこれが多いようです。

もうひとつのケースは、会場の美術館が企画し、作り上げているのだが、新聞社にも共催してもらおう場合です。この場合マスコミは、主に広報機能だけを受け持ちます。また、マスコミ主催でも、開催館がある程度の実務、例えば作品の出品交渉やカタログ執筆などの仕事を負担するなど、場合によって様々なケースがあります。(続) (ha)

「美術館ニュース」編集担当からのお願い

開館後7年を数える間に、千葉市美術館のニュース「C'n」も23号を数えることになりました。その間には、若干のレイアウト変更等がありました。内容は一貫して当館で開催する展覧会関係の記事を中心に編集してまいりました。館のPR誌的な役割は十分果たしていると存じますが、美術館の発行するニュースとしては、多少ひろく美術界のトピックを取りあげるべきか、また他館の展覧会情報など、情報誌的な内容も盛り込んだほうが魅力的だろうか、などなど、編集担当にも逡巡があります。そこで、読者の皆様からも内容に関するご意見をご感想頂戴できれば、幸甚に存じます。

編集担当は不在の場合も多く御座いますので、ご面倒でもご意見はお葉書、ファクシミリかe-mailなど書面で頂きたいと存じます。

260-8733 千葉市美術館 美術館ニュース係
FAX: 043-221-2316
e-mail: museum@city.chiba.jp

千葉市美術館

お問合せ：043-221-2311 ホームページ：http://www.city.chiba.jp/art

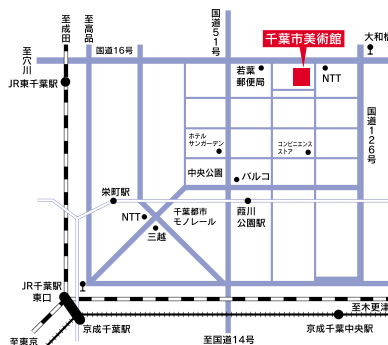
JR千葉駅東口より

徒歩約15分

バスのりばのりより京成バス「大和橋」下車徒歩2分

千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩5分

京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

【編集・発行】千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】2002年9月24日

【制作・印刷】株式会社プリンテックメディア